

# 都 京 大 学 図 書 館 問 題 研 究 会

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橘女子大学図書館 田北十生気付  
(Tel) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

## 第 1 3 回 支 部 委 員 会 の 報 告

### 報 告 事 項

#### 1. 全国大会に京都支部から7名が参加

- \*参加者 篠原、竹村、堤、呑海、酒井、藤井、松延の各氏
- \*次回会場 新潟に決定

#### 2. 全国委員会

事務局長が交代 長谷川光一氏(成城)から大西博昭氏(横浜国大)

#### 3. 「職員問題」ミニ研究集会収支決算

支出 51,000円

収入 50,500円

収入内訳	参加費 (41 × 500)	20,500円
	京都支部負担(予算)	10,000円
	大阪支部負担	10,000円

\*赤字 500円

### 審 議 事 項

#### 1. 支部報について

#### 2. 「職員問題」ミニ研究集会の総括

#### 3. 1997年度研究集会について

#### 4. 京都支部総会について

日時 1997年9月26日(金)

午後6時30分～8時30分

会場 京大会館 105号

名称 大学図書館問題研究会

#### 5. 次回支部委員会

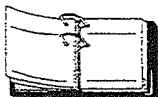
1997年10月7日(火) 午後7時

#### 6. 次回全国委員会

1997年10月18日～19日

目	第13回支部委員会の報告…………… 1頁
次	大図研全国大会に参加して …… 2頁
	大図研全国大会 障害者サービスは、自主企画…………… 4頁
	「職員問題」ミニ研究集会感想文—4
	専門職制度確立の運動は必要か …… 5頁
	数珠つなぎ② ……………… 6頁

支部報に関するご意見は最寄の支部委員または  
編集気付(京都橘女子大学 ☎ 075-574-4118  
FAX075-574-4124 ♥ kazuodesu@ma2.justnet.ne.jp)  
田北(takita)まで



暑い暑い街、福岡へ

## 第28回大図研全国大会に参加して

呑海沙織（京都大学）

### 1. 動機

駅に降り立つと、そこは暑い街でした。じりじりと肌を焦がすような暑さです。半ばくらくらしながらも、ただその暑さに身を任せてしまいたいような、そんな気分です。

思っていたよりもずっと近かった福岡に、魅了されてしまう予感がしました。大会参加の不純な動機？に、少し後ろめたさを感じながら。

それは、昨年（1996年）11月の大学図書館職員講習会にはじまります。4日間の講習会の間、有志で毎夜、自主交流会（？）を重ねました。そして、そのメンバーのうち約半数が、九州の図書館員だったのです。毎夜、図書館や図書館を取り巻く人間模様の話に花が咲きました。

図書館への思いや、理想と現実のギャップについて話すうち、お互い大図研に所属していることが判明し、

「来年度は、博多で全国大会あるから、来んしゃい。」

「絶対行くし。」

と、話はますますもりあがりました。

熱くて開放的な彼／彼女にもう一度会いたいという気持ちと、そして、最近、大図研から少し遠ざかっている自分を少し後押しする気持ちと、それが、今回の大会参加の正直な動機でした。

### 2. e-mail の効力

特に印象に残ったのは、この大会を開催するにあたっての打ち合わせに e-mail が使われたということです。特にメーリングリストを利用することで、細かな打ち合わせができたようです。大会準備にいろいろなことが重なって、精神的にくじけそうになっていたのに、会ったことのない ML メンバーにメールで励まされたおかげで、やり遂げることができたというエピソード

ソードも耳にしました。中傷メールや感情的なメールで必要以上の摩擦を起こしている状況に、時々でくわしますが、メーリングリストはかくあるべきだと思いました。

また、会場に数台パソコンが設置されており、刻々と変わる全国大会のホームページをリアルタイムで見ることができたのも、目新しい光景でした。

### 3. 分科会

課題別分科会では、「利用者サービス分科会」と「図書館システム分科会」に、主題別分科会では、「自然系（理工系／生物・医学系合同）分科会」に参加しました。

「利用者サービス分科会」では主に、ガイダンス・利用者教育について討議されました。ガイダンスの実践報告もさることながら、教官や学生に対して、図書館の存在をどうアピールするかという話題に興味をひかれました。これから先、図書館はどんな存在であるべきなのか、どうありたいのかを考えることも、もちろん重要ですが、それをどういう風に図書館を取り巻く環境に浸透させるかも、同じように大切であることを改めて認識しました。私の所属する図書室（京都大学工学部電気電子工学系図書室）でも、「図書室の存在意義を明確にして、それをアピールすること」という大きな宿題を抱えており、今後私自身としても、真剣に取り組んでいかなければならない問題です。

「図書館システム分科会」では、日本電子計算（JIP）の LINUS / U・リコーの limedio・NEC の LICSU / 21 など図書館システム教例が、紹介されました。LINUS / U と limedio は、UNIX を、LICSU / 21 は、Windows NT を OS とする図書館システムです。特に、LICSU / 21 は、UNIX システムの問題点、例えば、コマンドベースの処理形態、高価なソフトウェア、ユーザ側の開発利用の困難さをクリアした点で、注目を集めていました。実状は、どのシステムもそれぞれ問題点をもっているようです。LICSU / 21 を導入した某大学図書館では、カスタマイズ料金がかさんで、結局 UNIX システムと同じくらいの予算になってしまったという、笑えない話もありました。自館の業務にあったシステムを構築していくには、業務とコンピュータを結び付けて分析する能力 - システムアドミニストレータとしての能力 - が必要であること、また、業務を分析する段階で、図書館システムを業務に近づけるだけでなく、業務自体を見直し、業務を図書館システムにある程度近づける方向にもっていく必要性も痛感しました。

「自然系（理工系／生物・医学系合同）分科会」では、JCR の活用例・Web of Science の紹介・CA on CD の導入例など、充実した分科会でした。

### 4. 人的ネットワーク

大会中は二晩とも、人的ネットワーク作りに費やしました。おいしいお酒に、おいしい魚、おいしい話題（順不同）… と、もう、いうことはありません。にぎやかな夜の博多を堪能しました。杯をかたむけながら、何よりも、図書館を大好きでたまらない人々の中で、自分が図書館員であるという喜びをひしひしと実感しました。また、昨年出会った懐かしい面々との再会は、これからの活力になりそうです。

### 5. さいごに

第 28 回全国大会は、全国から約 150 名参加という大盛會に終わりました。これも、大会開催に携った方すべての汗と涙の結晶だと思います。間接的に直接的に、お世話になった方々、お疲れ様でした、そして、ありがとうございました。

予感通りすっかり福岡と、そして、改めて大図研に魅了された 3 日間でした。

（どんかい さおり 京都大学電気電子工学系図書室）

## <大会報告-2>

# 障害者サービスは、自主企画

報告者 松延 秀一 (京都大学)

福岡での大会2日目の夜、自主企画として障害者サービスが練り上げられ、急遽のぞみに飛び乗って博多駅に向かった。場所はアークホテル2階、楓の間隣の食堂で、20人近く集まったと思う。他の二つの自主企画が行われ、一つは竹村心氏による学術司書制度の提案の話だったらしい。

急に決まった自主企画であったから、手話通訳等の手配が出来ず参加者にノートテイクを依頼することとなった。次からは、分科会として設置し、手話通訳やOHP要約筆記もしくはノートテイクの手配も願いたいものです。

最初に九大理学部の鈴木昌和教授から問題提起があった。例えば、数式の読み方が統一されていないので点訳しにくい問題がある、とか、かなり専門的な内容であった。鈴木氏は、これを国立大学図書館協議会の身体障害者サービスに関する調査研究班にも提起したそうである。これについては、小生の方から調査研究班というのは2-3年の時限的なプロジェクトチームみたいなものであるので、提起先としてはむしろ点字図書館関係の団体、機関の方が良かったとコメントした。

その後は、参加者の自己紹介と職場での状況についての紹介に移った。文教大、和光大、東京学芸大、東洋大、大阪市立大等の実状というか、サービスするに際してのとまどい、が報告された。和光大学のように昔から障害学生を受け入れてきた所でも、図書館で、となるとまだまだ試行錯誤の段階、ということになるうか。

国大図協が調査研究班を作り、全大教の昨年の教研集会(京大)で、東大総合図書館の障害者(主として視覚)サービスの取り組みの歴史が報告され、この度の大図研大会での自主企画、おっと、大阪支部の例会では、大阪府立図書館の前田章夫氏を呼んでの障害者サービスの話をした、というから、やっと大学図書館界の一隅から障害者サービスへの動きが生じてきた、とは言えよう。国際障害者年(1981年)から16年目のことである。

さて、国大図協の調査研究班では、2年目の活動としてマニュアルというかガイドラインというか、そういうものを作成する計画であるという。その課程では多くの関係方面から提言を受け入れることが望ましい。そのマニュアルなり、ガイドラインが出来たとして、それは一応の目安とはなりうるだろうが、さて、実際に現場で実践するとなると、様々な課題、壁が生じることは、現在の図書館を取り巻く環境が悪化しているので、明白であろう。そういう逆風の中でいかにして大学図書館は障害者サービスを定着させていくか、大図研としても、分科会の設置はもとより、研究集会や支部活動、職組との連携などが必要となろう。

京都ではどうか。京都の各大学では、国公立を問わず他地区に比べれば、昔から障害学生を受け入れていたと言える。そういう経緯からすると、京都地区の大学図書館では、障害学生への対応経験があったはずと思われるが、どうだろう?個人的な経験にとどまっではないだろうか。京都支部として研究集会(支部例会は行われていないようだが)のテーマに取り上げてよさそうに思える。

## 専門職制度確立の運動は必要か

報告者 酒井 信 (名城大学)

大図研の97年度職員問題研究集会に参加して、図書館員問題の解決は、図書館員の能力向上と専門職制度がうまく切り結ばれた時であるという印象を持ちました。この研究集会が職員問題運動の出発点になるだろうとの思いは砕けました。やはり、「重い課題」です。

国立大学の図書館員が、入学定員の削減(大阪教育大では、1/3)、国家公務員の第9次削減(京大では、8次で専任職員が1/3減)、独立行政法人化、臨時職員の増加と様々な問題で苦しんでいることが理解できました。更に京大の「定員外職員の増加で人間関係上雰囲気が悪くなっています。」という報告を聞いて、やはり大変だなという感想をもちました。それに対して、利用者に役立つ図書館にするために図書館員のレベルアップを! 必要な資料を必要な時に提供できるように! という解決方法が提示されていましたが、それだけでよいのかという印象を持ちました。

私立大学については、問題解決の最先端(?)を歩んでいる立命館大学図書館の業務委託が報告されました。すべての業務を専任職員で処理するのは無理だという理由で業者に委託をすることを選択したとのこと。対象は、目録業務と相互協力の部分ということでした。その結果、「長期計画を支える人的スタッフが確保、従来、着手できなかった企画・政策への積極的関与、研修時間の確保」が出来るようになったと評価していました。しかし、「集团的・組織的業務遂行、契約から漏れた部分の処理、作業者の力量問題、契約職員の研修、専任職員の配転がさらに困難になる?」という問題点があるとのことでした。書店を特定業者に絞り、資料を安く購入し、業務の合理化を進めているとのことでしたが、教員との関係でよくできるなと感心しました。私の職場では、教員に業者選択権があるものですから。

アメリカの図書館では、専門職としての図書館員を維持するため継続教育や研修が重視されていることが明らかにされました。どこでも同じなのだという感想を持ちました。

討論の中で、大学図書館のサービスのあるべき姿が見えにくくなってきた、一般職員との専門性の境界が見えにくくなってきたという問題が出されました。しかし、なくてはならない、動かせない図書館員になること、持っている情報を利用して情報発信をすること利用教育に力を入れること、上級のサーチャーになることなどが個人個人の力量を高めることによる現状を克服する上での心構えとしていただきました。こうした努力も必要ですが同時に専門職制度を創る運動も必要ではないかとの思いを強くしました。

社会から、大学の中から専門職だと認めさせるためには、個人的な努力と組織的な工夫が必要ですが、制度として、大学図書館には図書館員を何人置かなければならないとか、司書資格が最低限必要であり、別に大学図書館員資格を必要とするという「大学図書館法」を制定させるとか「大学設置基準」に条文を入れる運動を進めていくことも問題解決の道ではないでしょうか。

(8月号に掲載予定でしたが、編集の不手際で本号になり、報告者にこの場を借りて、お詫び申し上げます。 編者)

戦慄の新コーナー!!

京都大学経済学部図書館

しのぼらけいこ

大図研京都数珠つなぎ 第20回

整理係

篠原恵子 さん

## え と せ と ら

“ああ、図書館司書になれた”と希望にあふれて京大にきてから、何んと33年の年月が流れました。附属図書館で和書目録、洋書目録を少し、4年目にウィルス研究所の一人図書室へ移り、5年目に医学図書館へ行き、現在経済学部図書室で働いています。

図書の仕事が大体分かり、大きな組織の中での一歯車なのかなと夢がすこしづつ小さくなりかけていた頃、大学紛争がおこり、全職員による全体集会が朝から行われ、口角泡をとばして議論を行っていましたが、結局文部省の枠の中に納められた感があります。

その後、大図研事務局が関西に移りましたので、10年間常任委員として、文部省の図書館政策や図書館職員のあり方等々を学びました。今、京大の図書館は、次期システムで揺れ動いています。

目録業務に関しては、ほとんどの図書室が学術情報センターへ入力しているのですが、カード出力の問題はあるとしても、何とか軌道に乗れそうですが、その他の業務は、それぞれの図書室の実状に合わせて独自のやり方をしています。今回は、富士通のiLiswaveによるトータルシステムで全学の図書業務を行おうとしています。

京大は、何しろ大所帯なので、附属図書館以外に、60以上の図書室があり、約300人が図書業務に携わっています。要望、希望は千差万別、部局図書室は従来の業務のやり方を見直しつつ、次期システムのいい所は乗ろうとしています。

windows、インターネット、e-mail、Z39.50等わからないことだらけで、昼間は何だか、新入職員のような毎日です。

将来、本という冊子形態のものが残るだろうかと、一抹の不安を抱きながら、家に帰ったら Reliured\*Art と称して、気に入った本をばらして、花布を編み、自分の描いた本に仕上がるよう皮を張ったりする作業をしています。次回の展覧会開催地を訪れるのを楽しみにしながら。

